

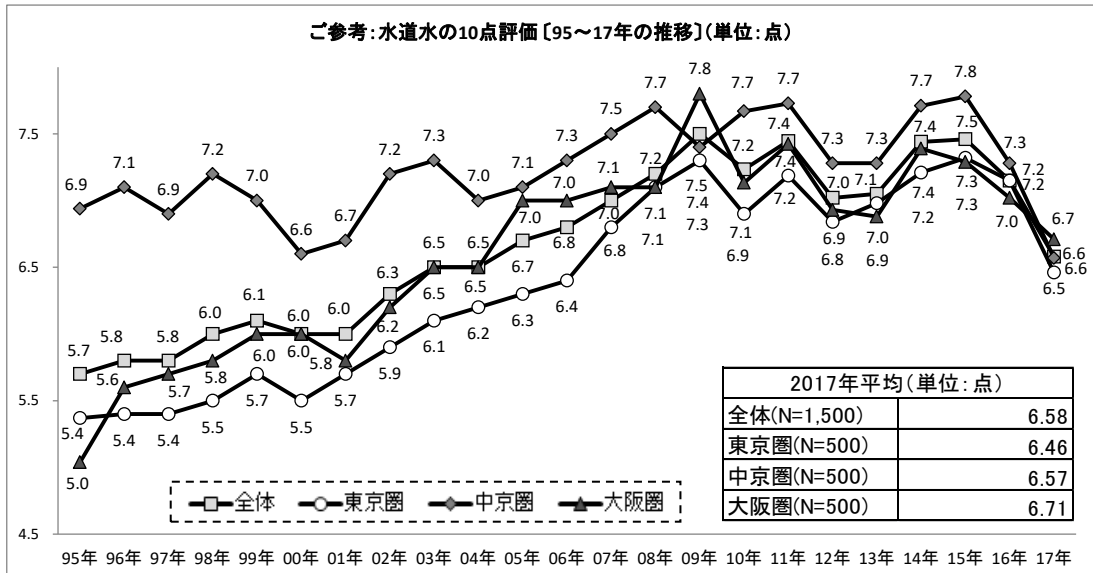
水道水に関する意識

Q.水道水を10点満点で評価すると？（0～10の整数を自由回答）

◇全体の平均が、7点台を大幅に割り込み6.58点に

昨年大きく低下した水道水の10点満点評価。今年の点数はどうだったのでしょうか。

全体の平均は、昨年(7.15点)から0.57ポイント減の6.58点と昨年に続き低下し、7点台を大幅に割り込む結果となりました。居住地別では、東京圏が0.69ポイント減の6.46点、中京圏が0.71ポイント減の6.57点、大阪圏が0.31ポイント減の6.71点となり、すべてのエリアで7点を割り込みました。なお今回、3エリアの中で平均得点が最も高かったのは大阪圏で、これは2009年以来2度目となります。

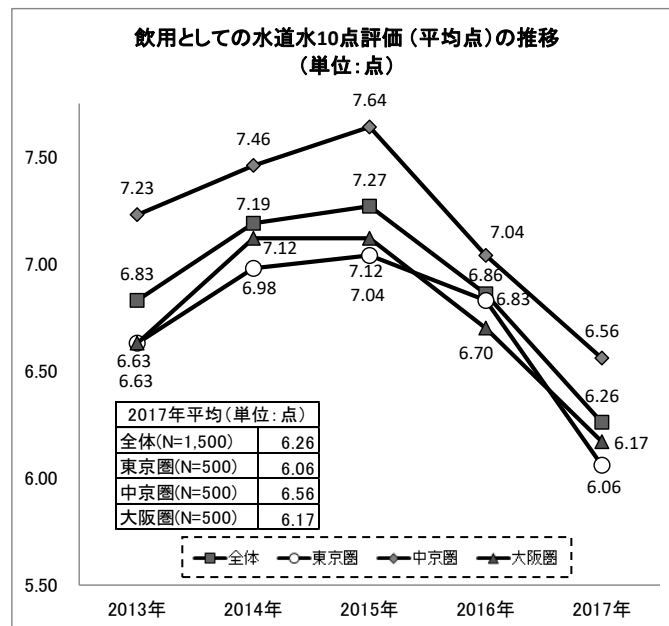


対象エリア：1995年…東京都、大阪府、愛知県、1996～2014年…東京圏(1都3県)、大阪圏(2府1県)、中京圏(3県)
有効回答数：1995～2009年…443～553、2010～2017年…1,500

Q.水道水を飲用水として10点満点で評価すると？（0～10の整数を自由回答）

◇全体の平均が、大幅低下で6.26点

飲用目的に限定した場合の水水道水評価についても、全体の平均が昨年(6.86点)から0.6ポイント減の6.26点、東京圏が0.77ポイント減の6.06点、中京圏が0.48ポイント減の6.56点、大阪圏が0.53ポイント減の6.17点と、上記の全般的な水道水への評価と同様、昨年に続き点数を大きく下げました。

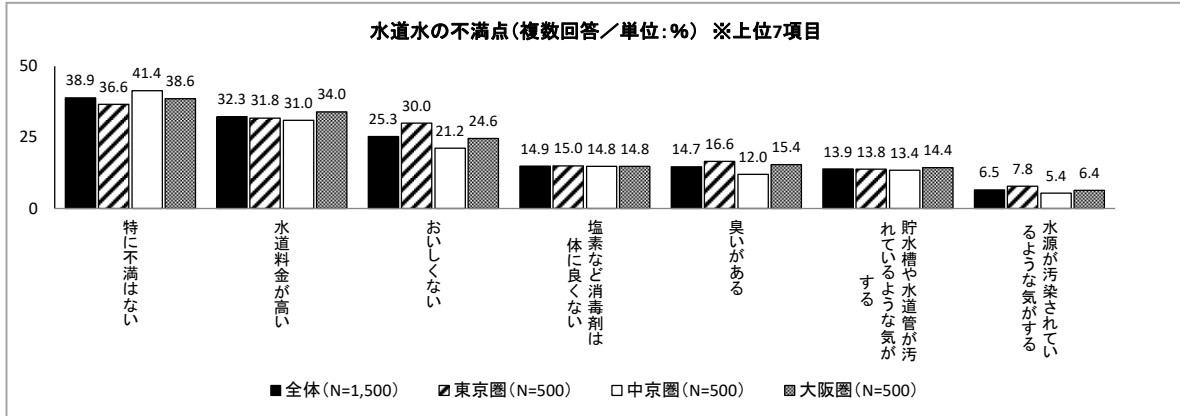


Q.水道水について不満を感じていることは？（8択＋その他＋特に不満はない）

◇相変わらず「不満なし」が一番多いが、具体的な不満点の1位は「水道料金」

前述のとおり、水道水への評価得点が大きく低下する中、水道水に対して不満を感じていることを改めて聞くと、約4割(38.9%)の人が、「特に不満はない」と回答しました。一方、全体の約3人に1人(32.3%)が「水道料金が高い」、4人に1人(25.3%)が「おいしくない」ことを不満として挙げました。

なお、居住地別において、中京圏では「特に不満はない」、大阪圏では「水道料金が高い」の数値が他のエリアに比べて若干高いなどの傾向は、昨年と同様でした。



沖大幹先生による解説 ~Oki's View~ ⑥

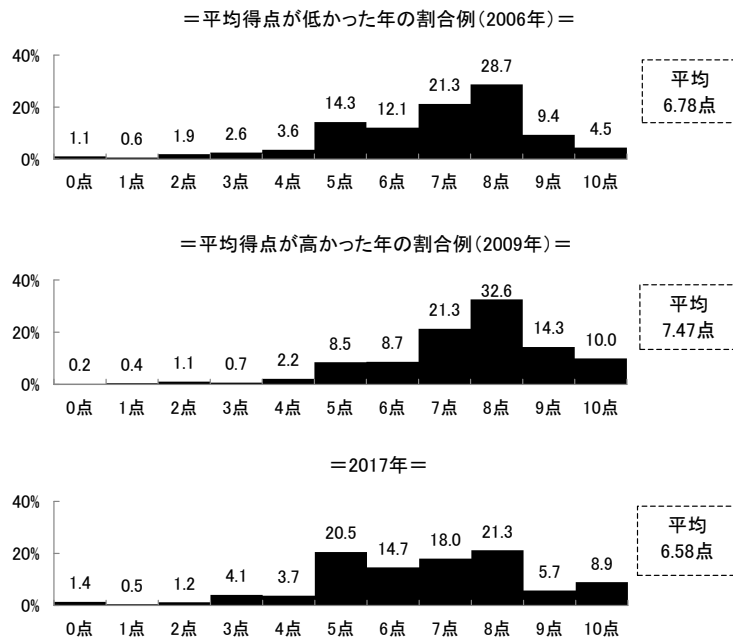
【水道水への評価】

水道水への評価が上がらない。2009年くらいまでは徐々に上昇していたところ、その後は横ばいで、今回は減少傾向に入った様にも見える(11頁・上図参照)。

詳細な分析によると、通常8点にピークがあるところ、平均点が悪くなると5点をつける人が増えてもうひとつのピークが形成される。すなわち、合格点として8点をつける人が増えると平均点があがるところ、良くも悪くもないと5点をつける人が増えて、結果として平均点が長期低下傾向になっているようなのである(下図参照)。

水道関係者に聞いてみても、特段浄水過程に変化はなく、味やサービスが大きく変化していることはないようだ。ただ、日本経済が長期的にデフレ傾向で他の物価が下がっているところ、多くの事業者で水道料金には変化がないため、相対的に水道料金を高く感じるようになり、結果として「水道料金が低い」という不満につながっている可能性はある。電気の自由化で他の公共料金が低下傾向であることとの対比もあるだろう。

また、集合住宅の貯水槽や建物内の管路の汚れがたびたび報道されると、それだけで水道水はおいしくないと思ってしまうたり、実際に管理が悪くて味がわるくなってしまっていたりするということもあるのかもしれない。



沖大幹先生プロフィール

沖 大幹(おき たいかん)東京大学 総長特別参与・生産技術研究所教授
「ミツカン水の文化センター」アドバイザー

1964年東京生まれ。1993年博士(工学、東京大学)、1994年気象予報士。1989年東京大学助手、1995年同講師等を経て2006年より現職。2016年より国連大学上級副学長、国際連合事務次長補を兼務。専門は水文学(すいもんがく)で、地球規模の水循環と世界の水資源に関する研究。書籍に『水の未来』(岩波新書、2016年)、『水危機 ほんとうの話』(新潮選書、2012年)など。生態学琵琶湖賞、日経地球環境技術賞、日本学士院学術奨励賞など表彰多数。水文学部門で日本人初のアメリカ地球物理学連合(AGU)フェロー(2014年)。



「ミツカン水の文化センター」と「水にかかわる生活意識調査」について

ミツカングループは1804年(文化元年)の創業以来、食酢の醸造を社業の中心としてきました。食酢の醸造に水は欠かせないものであり、ミツカングループは水の恩恵を受け、水によって育てられてきたといっても過言ではありません。それだけに、ミツカングループの水に対する関心は創業当時から一貫して高いものがありました。

1999年1月に、「水の文化」に関するさまざまな研究や情報交流活動を推進していく母体として「ミツカン水の文化センター」を設立。センターでは研究活動、機関誌「水の文化」の年3回の発行、ホームページでの情報提供、市民参加型イベント「発見！水の文化」の実施など、様々な活動を行っています。

「水にかかわる生活意識調査」も「ミツカン水の文化センター」の活動の一環として実施しているもので、研究事業や、一般生活者の啓発活動の基礎資料として有効活用頂くことを目的としています。